

あなたのスキルは社会に役立つ

エンジニアだからできる社会貢献

東日本大震災の発生直後に発足したHack For Japanや「市民が主体となって自分たちの街の課題を技術で解決するコミュニティ作り支援」を掲げるCode for Japanのメンバーを始めとして、日本各地で技術を活用した社会貢献活動が行われています。本連載では、防災や減災、地域の活性化や課題解決、そして人材育成など、「エンジニアだからできる社会貢献」の取り組みをお届けします。

第120回

東日本大震災から10年の節目！ Code for Japan Summit 2021(前編)

● Code for Japan 小泉 勝志郎 (こいずみかつしろう) [Twitter](#) @koi_zoom1
清水 俊之介 (しみずしゅんのすけ)

地域の課題を技術で解決する団体「Code for Japan」は年に一度、大きなお祭りを行っています。それが「Code for Japan Summit」です。この連載でもほぼ毎年レポートしています。昨年からオンラインになり、さらに規模も大きくなりました。今年のCode for Japan Summit 2021^{※1}は例年以上にテーマを強く打ち出した回となっています。本稿ではメインとなって運営をしていた小泉勝志郎と、東北のコミュニティとして10年の節目を象徴するセッションをしてくれた清水俊之介さんの2人が当日の様子をレポートします。

Code for Japan Summit 2021

2021年はどんな年だったのか？ そうです。この連載のきっかけにもなった東日本大震災から10年という節目の年なのです。

東日本大震災から10年

日本のシビックテックがどこからはじまったとするのかは議論の分かれるところだとは思いますが、源流の1つが東日本大震災時のエンジニアたちの活躍だったと言っても異論はほとんど出てこないでしょう。これまで経験したことのない巨大災害に日本全国のエンジニアが「何かできることはないか？」と立ち上がったときでした。ここからこの連載のきっかけとなるHack For Japanが生まれ、今回の

イベント主催団体であるCode for Japanにもつながっていきました。

そこで2021年は筆者(小泉)が代表を務めるCode for Shiogamaをはじめとした東北のCode for コミュニティが幹事団体となって開催しました。

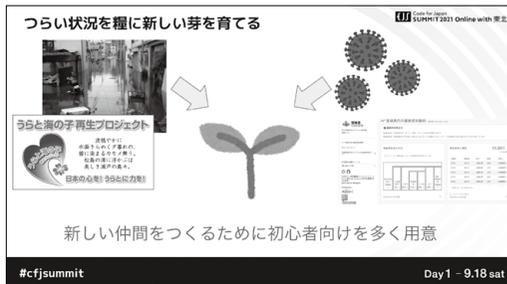
今回のテーマは「Rebirth」です。10年前の東日本大震災のときも、現在のコロナ禍も社会の大きな危機といえます。そういったつらい体験を逆に糧として新しいシビックテックの芽を育てる。そういう思いを込めてのRebirth(再生)なのです(図1)。このコロナ禍の中で、エンジニアたちも自らの力を未曾有の危機に役立てようと頑張っています。

今年は東日本大震災や東北をテーマにしたセッションが多く、さらには新しい芽を育てる意味でシビックテックの初心者に向けたセッションも複数企画しています。

初心者向けを意識

今回とくに初心者向けを意識したところとして、5分間のショートプレゼン大会を行いました。テッ

◆ 図1 オープニングでのコンセプト説明スライド



注1 <https://summit2021.code4japan.org>

ク系イベントならライトニングトーク(LT)といえど通じるのですが、非技術者も多いシビックテックの世界では一般的な言葉とはいえないので、あえてショートプレゼンという言葉を使っています。50分のセッションは難しいけど5分なら！ということで、半数以上が初登壇の方で非常に新鮮でした。司会はイトナブ石巻の尾崎健一さんが担当。キャリアプランナーである尾崎さんからの、フレッシュなみなさんへのコメントはこちらも聞き入ってしまうものでした。

イベント運営の工夫について

基本となるオンライン配信の構成はZoom + YouTubeというのは昨年と同様で、現在もオンラインイベントでは主流のやり方でしょう。

今回はスタッフ運営において複数の工夫をしました。「リアルイベントならこういうのがあるよね」というポイントをなるべく意識して行ったことです。

リアルイベントなら……

リアルイベントとオンラインイベントのスタッフで何が大きく異なるのか？ それはスタッフ間、そしてスタッフと登壇者間との交流にあると思っています。

筆者(小泉)自身、長いこと東北のITコミュニティでスタッフをしていく中で、一緒に仕事をした人たちと仲良くなり、交流が広がっていきました。オンラインイベントではこの交流がなかなか生み出しづらいのです。昨年のCode for Japan Summit 2020でも、ボランティアスタッフの間でとくに交流は生まれていませんでした。そこが運営全体の中で問題視されていたかという、実は全然そうではなかったんですよ(笑)。ただ、筆者(小泉)の過去の経験から「スタッフをやる旨味」をきちんと作り込む必要があると考え、交流を生み出すしくみづくりを行いました。

それは、日ごと、トラックごとにSlackチャンネルを分けるという試みです(今回は同じYouTubeのURLで複数のセッションが流れるので、各URLを

トラックと呼んでいます)。このSlackチャンネルに各トラックの登壇者、そしてスタッフが入ります。リアルイベントなら同じ会場にいるので交流が生まれるという状況を、オンラインで作るためのものです。昨年では「このコマは〇〇さん担当で、△△さんは休憩」というところまで決めてお願いしていたのですが、今回はあえて「Slackの中で相談して各自決めてください」という方式にしました。コミュニケーションをしないといけないしかけです。これもあってチャンネルによってはかなり頻繁に交流が行われ、なんと事前交流会をやっていたところまで！ サミットでスタッフすることをきっかけに仲良くなってもらうことができ、こちらもうれしくなりました。

この試みがうまくいったことで生まれたおもしろいハプニングもありました。それは、1日目のレオ(渡邊玲央)さんのセッション^{注2}でZoomのオペレーションを担当していた高橋そのみさんが途中から急きょ登壇者として呼ばれた(図2)というもの！ レオさんは「漫画家、ボクサー、消防士、そしてエンジニアという今までの歩みがシビックテックにつながる」という内容について話されていました。今年は1コマ50分のセッションなのですが、なんとレオさんの発表が半分ほどの時間で終わってしまったのです。そこで、レオさんが急きょスタッフである高橋そのみさんに登壇の声かけをしたのでした。

レオさんは、実は高橋さんと同じトラックでスタッフもされていました。スタッフ間、そして登壇者との交流がうまくいったからこそこのハプニングと

注2 「元消防職員の挑戦。消防業務にテクノロジーを使って、より多くの人を救いたい。一消防点検DXサービス「防点丸」」
<https://www.youtube.com/watch?v=-aPvvBZseVc>

◆ 図2 スタッフ高橋さんが急きょ登壇者に！





言えるかと思います！

気合を入れる！

今回、リアルイベントならこれはやるよねということで、イベント開始前に「サミット頑張るぞ！おー！」と、拳を突き上げて掛け声を上げるというのを、両日ともにイベントのオープニング開始1時間前に行いました。オンラインでやる意味はあるのかと思われるかもしれませんが、意外とちゃんと気合が入るものです。スタッフの人数が多いときにはとくに効果があると思います。

スタッフ説明会

当日のボランティアスタッフは大人数。そこで、運営マニュアルを準備し、スタッフの説明会も複数回行っています。このスタッフ説明会も筆者(小泉)がマニュアルの作成と説明を行っているのですが、実は筆者(小泉)はイベント当日の総合司会を兼ねています。つまり、全体監督者なしでスムーズに動いてもらわなければならないのです。先に書いた日ごとトラックごとのSlackチャンネルのおかげもあり、みなさん自主的に動いてくださったので、とくにトラブルなく終えることができました。

実際に当日スタッフだった清水俊之介さんから、スタッフとしての感想を！



筆者(清水)はサミット当日の1日目にトラック0のZoom配信担当として参加をしました。トラック0はキーノート以外、割と緩い雰囲気セッションが多かったのですが、初日のキーノートの配信に不備があっけはいけないとヒヤヒヤしていました。無事乗り切ることができ、あとは比較的和やかなムードで進んでいきました。事前にやることのリストがマニュアル化されていたり、事前説明会も頻繁に開催されていたりしたので、初めて参加した筆者(清水)でもなんのトラブルもなく作業ができました。

グラフィックレコーディング

Code for Japan Summit名物といえばグラフィックレコーディング！ 筆者(小泉)は過去開催の

Code for Japan Summitにはすべての日程に参加している皆勤賞なのですが、筆者がグラフィックレコーディングに出会ったのは初回のCode for Japan Summitだったのです。それ以来ずっとファンなのですが、今年は昨年までのメインスタッフが都合で参加できなくなったこともあり、存続の危機となっていたのですよ！

そこで過去のグラフィックレコーディングスタッフ経験者に声をかけ、Code for Fukuokaの徳永美紗さんを中心にチーム作りからはじめることになりました。そして、今回のコンセプトである「新しい芽を育てる」にふさわしく、グラフィックレコーディング初挑戦の方に多く参加いただきました。

徳永さんの尽力により、初めての人でも書けるようなくみ作りも行われています。グラフィックレコーディングが初めての人に向けた講座の開催や、1セッションに担当が複数人で当たる形式などです。そして打ち合わせも綿密に行われました。そのおかげもあって、初めての人が多いにもかかわらず、質の高いグラフィックレコーディングが行われたのです(図3)。

また、今回の当日スタッフ運用のカギである、日ごとトラックごとのSlackチャンネルはここでも効果を発揮し、グラフィックレコーディングスタッフと登壇者間でのコミュニケーションがリアルイベントのとき以上に頻繁に行われました。

キーノートセッション

今年のキーノートは一日目^{注3}が東北大学副学長の青木孝文教授(図4)、2日目が経済産業省の須賀千鶴さんでした。とくに青木教授は、東日本大震災時は研究を活用した遺体の身元確認に参加し、現在は仙台市のスーパーシティ構想のチェアマンを務めるという、東日本大震災からシビックテックへの流れという今回のコンセプトにぴったりの方です。2日目キーノートの須賀千鶴さんの講演は、ご自身のこ

注3 「大震災を起点として社会と科学を再考する ～身元確認DXからスーパーシティまで」
<https://youtu.be/8gVUqPBikWI>

